

福田ますみ氏が世界日報で東京高裁決定を批判

要点

- ・ ノンフィクション作家・福田ますみ氏が世界日報連載（2026年4月9日・中編）で東京高裁決定を批判
- ・ 家庭連合側の反証が「実質的に無視された」とし、「初めから解散ありき」の審理だったと論じる
- ・ 決定後に清算人がパトカー3台を伴って教会に乗り込んだ件も取り上げ、「圧力効果」を指摘
- ・ 福田氏は月刊『Hanada』でも文科省陳述書捏造疑惑を追及してきた

ノンフィクション作家の福田ますみ氏は2026年4月9日、世界日報の連載（中編）で東京高裁の家庭連合（旧統一教会）解散決定（同年3月4日）を批判する論考を発表した。福田氏は月刊『Hanada』4月号でも文科省陳述書捏造疑惑を追及しており、一貫して審理過程の問題を指摘している。

「初めから解散ありき」の審理

福田氏は連載で、東京高裁決定を「中立的な審理の結果」ではなく「最初から結論が決まっていたような異質な判断」と位置づけた。同氏は、家庭連合側の具体的な反証・反論・証拠類が「決定文の中で十分に扱われていない」と指摘し、「争点を丁寧にぶつけ合って結論を出したというより、片側の論理に大きく寄った判断だ」と述べている。

記事中では決定内容が「抽象的な言葉や広い概念で組み立てられており、個別事実を厳密に積み上げた判断になっていない」とし、「印象の強い表現で押し切られている」との見方も示された。

宗教法人法への波及懸念

福田氏は、この判断が一宗教法人だけの問題にとどまらず、宗教法人法全体の運用基準を揺るがすと論じる。「今回のような理屈が通るなら、将来ほかの宗教団体にも広く適用されうる前例になりかねない」とし、法解釈の拡張と運用の恣意化への警戒を促している。

「パトカー伴い乗り込んだ清算人」

連載は、決定直後に家庭連合の教会へ「パトカー3台」が来訪した件も取り上げた。福田氏は「教団側が危険だったから警察が来た」のではなく、「清算人側の要請や演出によって警察同行が起きたのではないか」との見方を提示。「警察の存在そのものが中立的な安全確保ではなく、教会側に圧力をかける効果を持った」と論じている。

同氏は、この出来事を「司法判断のあとに、清算や管理の局面でも強い実力的な対応が続いており、全体として一方向の圧力が積み重なっている」構図の一部として位置づけ、「解散・清算のプロセスが法的整理を超えて、宗教団体への威圧や信用失墜の手段になっているのではないか」と問題提起している。